WASON
HQ
1104
J74+

驛遞局認可
明治十八年十二月二十日發行

女學雜誌

毎月三回發兌
一册正價四錢

第拾壹號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Kokoro ari te, kaze ni nio wasu, sono no ume ni; mazu uguisu no, towazu ya aru beki. (下に譯あり)

女學雜誌第拾壹號目次

●社說。女學雜誌の改良を祝し併て吾等の履歷と目的とを述ぶ、女敎の維新●新報。拾件●文學。伊勢物語、歌まくらのと、又曰くいろ〳〵、西洋禮式の大概、詩歌の心ばえ●技藝。三味線の事、淨るり節付の名目、食物の調理を心得べき事、●佳傳。小野小町の傳附圖●叢話。婦人慈善會、美麗と云ふ事、珈琲を飮む心得幷に雜話。夫婦の間禮ありて官を得し事、婚禮に白色を尊む事、女房と云ふ事●寄書。歲暮に臨み同胞姉妹に告ぐ。和歌二首、發句二、詩二首●各國離緣の表●諸廣告

明治十八年十二月二十日

●珊瑚の珠

●凡て女の衣裝麗しからんことを願へるは人の眼を驚かし心を惑はしめんとを求むる邪ある心より起りて淺果敢なる情根あり誠の心なくして外の飾のみを心にかけなば爭でか人に慕はれ侍らんや身には綴衣を掛け侍るとも心を錦にし侍んこそ女の本意ならめかも

●英雄豪傑の事業を成したることを見るに婦妻の内助を得しこと古今其例少からず若し此等の識力材量なきときは不幸にして其夫死するに及んでたとひ家產は豐富なりとも決して家を保持する能はざるあり

●いにしへ女子の嫁ずるとき其母中門まで送りて誡しめて曰ふ汝が家に行きて必ずつゝしみ必ず誡しめて夫の心に反くと勿れと云へり是れ古の女子の嫁するとき親の敎ふる禮法あり女子の父母よく此の理と言ひきかせいましむべし女子も亦たよく此の理を心得て守り行ふべし

こゝろありてかぜにほはすそのゝうめに
まづうぐひすのとはでやあるべき

女學雜誌第拾壹號

●社説　（明治十八年十二月二十日）

○女學雜誌の改良を祝し、併て、吾等の履歴と目的とを述ぶ

明治十七年夏五月吾等同志の者二三相ひ會して時事を討論したるとき談偶ま日本婦人の事に至りて共に大に慷慨する所あり相ひ約して一雜誌を發行せんと欲し急に奔走拮据して事務漸く緒に就き同六月十五日遂に其の第一号を發刊して世に問ふに至りたり之を女學新誌と云ふ當時女論未だ起らざるに先ちて此の舉あり加ふるに吾等の微力にして且つ未熟なる素と能く世路の難きに堪へずと雖ども幸ひにして風潮少か轉變の傾向あり婦人慈善會亦た同時に起りて少の吾等前途の期望を確固めたるを以ていよ〳〵奮ひていよ〳〵勉め爾后一ヶ年間毎月二号の新誌と定刊して少か世に報ふる所あらんとしたり如此して明治十八年の夏に至り年紀一週して新誌の發兌凡そ廿三号に至る此時世論既に全變して時事新報、日々新聞、毎日新聞の類其の他大凡そ世上の木鐸を以て任ぜる者等は皆な日本婦人教導の事を唱論するに至りたると此れ尤も慶賀すべき所ろにして吾等の期望其の半を達し大幸之に過ぎたるはなかりき然るに事業成り難く、世情圖り難し、此の際言ふ可からざるの不幸に會して吾等斷然女學新誌社と退き別に新に同主義の雜誌を發刊することとなりたり此れ本年の夏七月廿日第一号を發兌し來りたる所の本誌にして女學雜誌即ち是れ也當時吾等乙身書生にして固より會計の事に熟せず之を專ら万春堂の主人（今ま猶は本誌の持主たり）に托して只だ吾等の志論を達せんことを熱望したり然るに今や事務稍や調ひて社況亦た可なり加ふるに世の要する所ろ既に吾等の供する所に過るの勢あるを以て今度別に一社を設立し女學雜誌社と稱し茲に專ら本誌の編集發行を務め内外女教の事に關係ある書類を飜譯著作して一意吾等の素志を貫くに至らんと欲す彼の女學新誌あるものは今ま既に休刊の姿を爲りたりと雖ども女學叢誌と云へる者新に世に起りて女教振起の事に熱心すと傳聞するを以て吾等前年世論中に孤立したるの當時に比較する時は今回の創業決して至難にあらざるを知る抑も吾等の望む所は日本の婦人を教導して之に其の眞正なる地位を得せしめんと欲するに在り世上若し賛同の人あらバ豈に大賀せざるを得んや希くは共に與に協力して此の志望を達そるに盡力するあらんとす然れども吾等が女教に關するの意見は少しく世人と異れり恐くは當今世の女論を以て任とする諸子と合はざる所あるべし、要、相ひ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

討論して其の何れか我國に適するやと明定するに在り希くは之れより僻見を去りて熱情單に愛國の上に安んじ世上の諸君子と相ひ討論して以て日本の婦人を正々に教導するを得んことを謹んで祈禱すと云ふ

○女教の維新

日西の山に沒して月未だ東の峯に登らざるに當りては四面暗々として物の黑白を弁ず可らず又た有明の月既に隱れて日未だ光を發たざるに當りては天地陰々として色の朱紫をも別つ可らず大凡そ有りふれたる教の漸く廢りて新教の尚は行はれざる時代に於ては世上の道德大抵皆な如此き有樣なること有り」試みに維新前の昔日を顧れば孔子の教天下に行れて忠君孝父の義明白なる道理となりければ人にして忠ならず孝ならざるは世に齒ひするを得ざるものと迄でに擯斥らるゝことゝなり假令ひ世間の人は悉く忠臣孝子とはならずと云へど皆な此の教に制せられて勉めて道義の事に注意したりしより世の景況も今日の程とはならざりしに今まは孔子の教既に廢りて世上に之を尊む者あるは最と稀れなる程となれりしに不幸にして之に代るべき新教の尚は廣く行はれざるより不忠の臣不孝の子も決して人ならざるに非ず姦淫、詐僞、不仁、の行ひ決して昔日の如く世に擯斥さるゝに非ず甚しきは衆人稠座の宴席に淫猥の談を誇り、朋友知人の間に奸欺の計を得たりとし、親戚兄弟の親しきにも尚は不信切の行を愧ぢざるに至れるは此れ實に日沒して月登らざる暗々の時にして世上の道德至極に廢れたる節と云ふべく畢竟これ孔教滅して新教の未だ行はれざるが故になるべし之を以て世上の君子は近來やうやく此の點に注意して基督教の道德を奬勵せるに尤も宜しきことを主張するもの大に增加せる景況あるは尤も喜ぶべきことなるべし

孔教如此く廢れて世を制治するの功德殆んど滅せんとするの景况なるを以て其の婦女を制したるの教も亦た近來大に世に擯斥さるゝことゝなり彼の女に三つの從ふべきありと云ひ女は才なきを可とすと云へる如き失敬の教理は最早や何人も採用することなきに至りたるは世運開化の證據にして喜ぶべきには相違なしと云へども此の際もしかゝる從來の教に代りて十分なる教導と爲すべき新教の行はるゝなくんば婦女社會の此れより漸く不道德に流れて恰もかの男子が維新以來今日に至る迄で年々歲々に不行跡となりたる如き次第に陷るべきとは甚だ明白なるが故に女教の有明の月漸やくに隱れんとする今日に臨み早あさ日の東山にかゝやきて色の朱紫を明にすることなくてはかなはぬ理也

然らバ如何なる教を以て從來の孔教に代んやと云ふに彼の現今男子の不道德を制治するに到底西洋に行れる丶基督教に由らずしてハ不可なりと云ふと既に明となりたるに連れて婦女も亦た此の教に隨ひて其の身を終るとの宜しきハ明白なるべし蓋ハ昔しこそ西洋人を以て獸類の如く思ひ居たるなれ今日となりて考ふれバ獸類ハ反てかく云ひけん日本人なるやうと思ハれ西洋人の家内に入りて父母兄弟相ひ愛するの愛、朋友親戚相ひ親むの情を見る時ハ我が國人の如何に心うすきかを悟り得べきなり孔子の教に依りて治りたる支那日本其他と今ま基督教の行れる丶國々との有様とを比較すれバ兩つの教の優劣自ら明となる次第となりたらバ彼の鐵道電信何くれとなく凡そ西洋より輸入したる如く道德を支配すべき教も亦た西洋人と一様なるものを輸たすべきを至當とすべきならむ

されバとて基督教とハ如何なるもの乎又る基督教に所云る婦女の教は如何なるもの乎此等の事明白ならざる間ハ之を守行すべきやうもなし又る此の教を守行すると云へる西洋婦人の道德ハ如何なりや日本婦人に比してハ宜しき所ろのみ多けれ感信しがたき所も亦た尠からずと云ひ假令ひ西洋婦人の爲す所ろ一々に宜しくとも之を悉く吾國に行ハれせんとハ惡しき覺悟なるべきなんどくさ〴〵の論らふべき條多しと云ふべし左れバ此等の事ハ余白ある毎に追々論ずべきの心得なりと云へども讀む人々は今日と女教維新の時なりと承知して如何なる教か孔教に代り得べきやを心に問ひ心に答案を要め玉ふべし

●新報

○御歌會始掛員　來年一月御歌會始に付點者以下は左の通り仰付られたる由

點者　參事院議官福羽美靜、宮内省三等出仕高崎正風○讀師正二位松平慶永○講師　從五位脇坂安斐○發聲　從四位綾小路有良○講頌　正二位正親町實德、從四位大原重朝、同冷泉爲柔、同毛利元敏、正四位長谷信成、從四位石山基正

又正四位松浦詮、從四位西四辻公業の兩君ハ右御歌會御用掛を命ぜられたるよし

○浴湯の改良　預ねて東京府より布告ありたる條例に隨ひ今月初めより何處の湯屋も皆な男女の境界を確たくして少しだも相ひ眺め合ふ如き不都合なき樣に改めたり西洋人は婦女が皮膚を露ハすことなんど丶聞のバ野蠻此上なしと思ふ程あるに全体裸にして男女互に眺め合ひ得べき程のとに至りてハ何人と云へども輕汚して我國の悪風を誹らざるなかりしに今ま如此く改良なるに至りたるハ尤も喜ぶべきとなり希くは更に進歩して浴湯と一人づ丶に限る如き美風となるやうならしたきとなり

○束髪の盛衰　一時非常に流行したる束髪も此頃は追々と減ずる摸樣なるは尤も歎かはしきことなり固とく便利と經濟と衛生とを思ひ合はせて改めたるべきをのく少しの間に後戻りせるとも頼母しからぬとなり然し此は必竟寒氣と共に頭上が冷ゆる故ならん油もなく束ねねも低ければ其の筈なれども然ならバ早く帽子を戴くが宜しからん日本服にて帽子を戴くと心地あしと云ふ人もあらんか然れど男子は大抵皆な然らずや凡そ習慣を破りて新風俗を造らんには大抵の事にては能はず女學校の女生徒を初め有志の人々は斷然奮つて帽子を戴き且つ前頭を斷ち玉ふべし是れ實に世を導くの勇なるべし而して發起人の方々は勉めて早く適當の帽子を工夫あらんことを乞ふ

○細見うり　去年は新聞紙上に遊廓の廣告を出して人を善きに導くべき新聞紙上に於てまで人を地獄に案内する手術を運らしけるに政府直ちに之を禁じたり又た此頃となりて古來の細見うりも均しく禁ぜらるゝ樣となりしときくは實に喜ぶべきとなるに茲に近來怪しむべきは所々の牛肉や湯店の女を初として甚だしきは普通の家の妻娘までをも取り調べて其の中の美人鑑の如きを製ふへ夜な〳〵賣り歩くものある如し如何に利に走るものの ありとて惡むべきの太甚しきものと云ふべし之と細見うりに比すれバ更に太甚しきならずや希くは政府の速に亦た之を禁じ玉はんことを

○婦人愛憐會　我邦の婦女は教育に乏しくして其身を立つべき一の藝術職業を知らざるより一旦不慮の災難にあふ時は止むことを得ず身を苦海に沈め禽獸に均しき賤業を執り再び人間社會の交際をなし得ざるに至るは憫然といふも餘りありとて豫て慈善を好まるゝ貴女たちが申合せ斯る不幸のものを救はむとて去るころより愛憐會といふものを設け會員たるものは何事によらず各自の習熟する所のものを製し買人あらバ之を賣り猶餘りある時は米國へまで送りて之を販ぎ其代價を積立て相當の金額となると俟ち右の如き窮困の婦女ある時は之を贈りて職業に就かしめ又は教育に就くの資本となさしめむとて此ほども赤坂氷川町の米人ホイトニー氏の寓居に集會し種々出品もあり同氏の夫人と彼れ此れ相談せられし由賛成者も日増に多く追々盛大の摸樣なりと云ふ（十八年十二月十一日朝野新聞）

○私立大坂女學校　同校は府會議員大三輪長兵衛氏の設立せし者なるが讀書、算術、習字、裁縫、彈琴、挿花、炊爨の法等に至る迄婦女子の心得置くべきことは悉く教授し且つ教則も充分定成せしを以て日々に來學するもの多く現今生徒の數は二百餘名に及

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

びし由依て一層の隆盛を圖らんと今回播州姫路の和學女史山田淳子を聘して生徒に和歌和學等を敎授するよし

○朝鮮婦人　此の程朝鮮よりの通信に添へて同國婦人の眞像を送り越されしが其添書を見るに一体朝鮮にては婦人の額上平かなるを美人と稱し都て額を剃りて生際を平かにすることと丁度我國にて富士額と云ふを佳とすると其意を同うするものあるべし故に朝鮮婦人は一躰に圓顏に見え髻は頭後に束ねて笄を挿したり此笄は銀或は眞鍮を以て造り珊瑚等を用ひたるは餘程高貴の人にて之が品位を見分るには下裳を見れば一目にて判然とすべく凡そ綠色を着けたるは高貴の婦人にて中等下等人は白色或は水色を用ひ下婢に至りては是非とも紺色のものを着くる事ありと本月十一日の朝野新聞に見えたり

○婦人撰擧權　英國婦人撰擧權擴張會の委員は撰擧人に宛て陳情書を發したり該委員の云ふ如く英國の婦人は其の合法の資格を有する者として國會議員撰擧の事に干與せしめんと欲し之を國會の正義に訴ふること玆に十有八年あり或時は二十五万有餘の同志が調印したる歎願書を提出し又た或時は大集會を開き遂に數多の婦人撰擧權擴張會が不屈不撓の熱心に依りて下院議員の過半を說服し之をして婦人撰擧の障礙物を排除せることに左袒すべしとの約を立てしめたり夫れ既に斯くの如きの事實あり之れに加ふるに擧國の民心漸く婦人撰擧權擴張の事に傾注し合格の婦人を撰擧外に放逐するは唯だに不正の事たるのみならず國家全体の利害上より觀察するも亦た不利の事たるを覺知せるに至りしと雖も未だ曾て之を實行せんとせる者あらず先に國會の議定したる一大改正案の如きも其の主眼とする處能力ある國民をして撰擧權を有せしめんとせるに在りながら他の多數の能力者に至りては唯だ其の婦人たるの故を以て之を度外に措き曾て一人の之れに論及する者なくして議場を通過したり去れば該委員は婦人をして國家の立法者を撰擧するの重事に干與せしめざるより生ずる種々の弊害を指摘し殊に法律上男女の待遇を異にするが如きは其の最とも甚しき者たるを辨明し可及的速に婦人を撰擧權の區域外に放逐するの弊法を廢絕せんことを哀訴したりと本年十月二日の倫敦毎週タイムスに見ゆ

○ペルメルガゼツト新聞記者の處刑　倫敦の密賣淫を摘發して一時の物論を駭動したるペルメルガゼツト新聞記者ステード氏は自ら其營業を犯したりとの嫌疑を受け先頃より法廷にありて其審判を受け居りしが今十一月十日倫敦發の電報に據れば同氏は三箇月の禁錮を宣告され之れに連累するジヤツクエス氏は同

一箇月の重禁錮に處せられシヤレツト及びモーレーの両女は各々六箇月の重禁錮を申渡されたりと去る十日の時事新報に見えしが世の大弊害を矯んとして直筆したる新聞記者が自ら其罪に坐すとは文明國の記者に似合ざる所業と歎息せざるを得ざるなり

○「英語かるた」と「羅馬字のるた」　馬喰町二丁目興文社より發兌す、これは子供をして遊戯の間に英語及び羅馬字の讀み方を覺えしむる工夫にて編製せし美麗のかるたにして令娘諸君などの新年の御慰みには最も適當のものと思はる委しくは廣告の部を御覽せられよ

●文學

○伊勢物語

此物語の奇特なる文章たると古今集にて知られ侍り古今は卷頭より歌及び言葉がきを貫之みなあらためなほして入たり然るに此物語の詞に至りてはその儘なが〱と書入たる所なほし歌書とよむには家々口傳これあり師をもとめてつたへずしては其詮なきものをやその中にうちまぜて双紙歌書とは五音の中に宮の調子によむべし詞をば歌をよみあぐる如く風流ありてうつくしく又其中にも力ある詞をば辞とおもくゑばりてよむ也てにをはの文字はこゑをあたらずかろ〱とよむ女の詞はやはらかに位ある人の詞はたけたかく優に品いやしきは、打ひらめにかいとりてさば〱と僧の詞は文字にあたりてつよく歌とむ常に物がたりする如くなや品なしによむ也詞と歌とと常にはかへてよむ事は文章とよむ法也第一には口の開合次には文字句頭の鈎鎖たゞしくよむべしされバとてあまりに開合めきたるも聞にくし只文字にあらずこゑとうけてよめバやすらかにうつくしく聞ゆるものなり

凡そ書と講ずるにはその本書より前のことゞバ引用ゆべし後々の事を引とその理なし但し詞などの證據には後々の書をも引用るとも又法なり又初學の人の爲にも可然本據古歌來歷の故事等をも引出して道にいるの便とする事もあるべし

此書と講ずるに先づ一段々の初めにおいて何たる事をいひたてたると覺悟し評判とくはへてみるべきなり周詩三百余篇も篇との初めに國司が此詩には何事といふたるとも又みたるとも刺りたるとも首序に書て知らせたりこれによつて詩の心を領納する也又た倘書にも小序とて一篇の大意をしるしあらはせり惟淸抄に云ふ此物語には好色の事と賦すといへども是を玩味するに仁

をふくむものあり義をいふものあり禮を存するものあり時を感じ世をうれふるものあり飛花落葉を詠じて無常を觀ずるものありそのおもむき一にあらず徒に好色の事とみるは益なし詩三百篇も男女の事を用てとをくは國を治め天下を平らにしちかくは家ををさめ身を立あるひは善をすゝむといふは子としては孝あり親としては愛あり臣としては忠あり君としては禮ある類なりあるひは是にさかふて其身不義におち入ものを擧て惡をこらさしむる也　（未了）

○歌まくらのあと　小花女史　碓井

歌まくらといふに三つの義ありひとつは本に歌まくらをおきて末に思ふ心をあらはす序歌の序を云ふ但しこれをくはしくいへば、久かたの、あらがねの、などの五言の一ことも序なり、風ふけばおきつしら波、山ざくらかすみのまより、などの五七の二句つらなるも序なり、たらちねのおやのかふこのまゆごもり、ゆふ月夜さすやをかべの松の葉の、などの五七五の三句つらなれるも序なりまたひとつは草木鳥獸などによせて思ひをのぶる歌に初句にさくら花とかまたはほとゝぎすとかいひ出せるとも歌まくらといふ千五百番歌合に「かきつばた色に出てはかくれぬとそこ とも人にしらせそめつる」とある歌の判詞に右のきつばたは常の歌まくらなり色にいでゝぞしらせそめつるよしありて見え侍ればとあるこれなりまたひとつは名所をいふされど名所もまことにその地をふみてよみいれたるはうたまくらといふものにあらず名所とかり用ひたるが歌まくらなり「ちはやふるかものやしろのゆふだすきひと日も君とかけぬ日はなし」「よし野川いはきりとほしゆく水のおとにはたてじ戀はしぬとも」などの如きをいふこれよりうつりて住居にならびて住の江のきみの姬松とよみ不盡の山をのぞみて、時しらぬ山はふじのね、といへるをも歌まくらといふやうになれるより名所となべて歌まくらといひはじめたるなり（寄居歌談）これらのゆゑよしをも心得おくべきことなり

○又曰くいろ〳〵

無名抄に曰く歌の序は古今のかな序を本とす又曰く日記に大鏡のさまをならぶる又曰く和歌の言葉は伊勢ものがたり幷に後撰の歌のとゞとまねぶ又曰くものがたりは源氏に過たるものなし又曰くはねたる文字入聲の文字のかきよくきはみなすてゝかくなり又曰く萬葉に新羅をしら古今の序には喜撰をきせこれら其證あり又曰くさなみさゞなみさゝら波言葉廣略あれば時にしたがひて用ゆ又曰く筑紫には四五月ごろあけくれ波たつ四月にた

つをうなみ五月に立とさなみと云ふ卯月皐月の故にや又曰くこのもかのもと云ふと筑波山にハ限らぬよし無名抄の中に清輔の何れの山にか讀し證を言たり（大井川の會に躬恒か序かけるときなはゐ川このもかのもにと書り）又曰く蛙といふと井手の里なかぎる又曰く逢坂の關のしみづは走井となじ處ならず關寺の西なり三町程なありとぞ水はわらで少しひくき處にて名のみのこれり又曰く志賀郡に黒主明神あり大道よりすこし入て山際にあるよし又曰く喜撰の跡みむろどのおく二拾余町山中にあり又曰くますほのすゝきと穂長くして壹尺ぞのりあるなり（十寸万葉に有り）又曰くまそをのすゝき眞麻の心なり俊頼のうたに「まそとの糸とくりかけて」と讀り糸などの乱れたるやうなるなり又曰くまそうのすゝき誠に蘇芳なりと云心略語なり

○西洋禮式の大概

世の開け行きて自ら外國人と交の親しくなるのみならで吾が邦人の間にすら彼の國の禮式行はるべう見ゆる今日となりては西洋禮式の大槩を知ると大切の事なるべし

第一　初對面の禮

紹介人なくして未知の人と對面する時ハ自ら名刺を出すか又は姓名と名乗りて知己となるべし

紹介人ありて男子を婦女なるの、婦女を男子にの、初對面せしめんには先づ婦女の承諾を得たる后ち男子を連れ來りて之に面會さすべし婦女を之に連れ行くとなし

初對面すべき両人とも男子なるの又は共に婦女なるときハ其の身分の上下に隨ひ身分同じき時ハ年齢に隨ひ身分低きもの又ハ年若き者を連れて引き合はすべし

紹介人ありて初て對面したるときハ握手の禮を爲さずして只だ拜禮するを可とす再會の后よりハ握手を行ふなり

禮拜とハ緩かに身を屈して頭を垂るゝを要す日本人の如く輕ろくしく急に爲す可らず

握手の禮にハ一定なきが如くなれども温和に手を握りて亦た温和に放つを尤も宜しとす手指のみを握るの又は握りたる手を突然に放ち落とす可らず

手套を脱せずして握手するとも無禮にハあらず

友人の添書を得て未知の人を訪ふ時ハ自分の名刺と添書とを差し出し置き家内に入らずして歸るべし主人は客の面前にて添書を開く能はず之を開かざれバ其の人と爲りをも知る能はざれバなり故に主人は其后ち書状を送りて此の人を招待し初て對面すべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一友と逍遙するとき一友更に來りて同行すとも兩人互に知己たらんと欲せざるの間は之を紹介す可らず

○詩歌の心ばえ

なべて世の人情はかはらぬものにて詩歌に物を詠ずるもこゝろばえは同じかれどもその詞の和漢異なるのみ去れば句題の歌にも白氏の句を定家卿のよみたまへるなどそのたくみまたあるべくもおぼえず斯くて鄙賤のものとても月は月、花は花、樂しみ憂ひいさゝかかはれるとなけれど詞の雅俗によりてそのとのうるはしく聞ゆるといやしかるとのわかちあるなり或る人云ふ陸放翁と西行法師とは時代も大かた同じくその吟咏のたえて似たりと放翁の詩に何方可レ化身千億。一樹梅前一放翁。西行の歌に　よしの山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねん　といへるは詩歌ともにその心ばえ全く相似たり又た唐詩の陌頭楊柳枝。已被二春風吹一。妾心正斷絶。君思那得レ知。といへるを服南郭の和語に譯したるに　道のべの青柳すがた風に吹れてゐるわいの。わしが心はやるせなやぬしがこゝろに去りはせん。

●技藝

○三味線の事

三味線はもと蠻樂の器にて琉球にて專ら翫そび海蛇皮もて張るればは世俗はジヤヒセン（蛇皮線）といへり文祿年間瞽者石村撿校それが弟の平兵衛といふものと同じく琉球國に渡り兄の撿校は其曲を習ひ弟はその製作をならひ得て歸り石村平兵衛はじめて三味線をうちたりそのかみは寸尺定りなし扨てかの石村撿校が琉球にて習ひたる唄

チヤウリヤウ、フリヤウ、ソレヒヤウラニ、リヤ〳〵ニ、イヨ
アリヤヨイ、フリヤウソレルリヒヤウフリヤウ、

此うたの三味線の手にて石村撿校のはじめて作りたる唄

ちよの始のてんに照る月は、十五夜が盛りよの、あの君さまはいつもさかりよな、

撿校これに次ぎて七組の曲を作る琉球組もその中なり此とき猶は三味線の寸尺定まらず一二三ともに上駒とうけたりその弟子虎澤撿校あらたに六組を作る其後ち柳河撿校はじめて三味線の長さを二尺一分と定むその弟子淺利撿校佐山撿校市川撿校など皆な三味線の名人と稱す殊に佐山撿校の端手七組を作り手事といふことをはじむ且つ二上りの調子を始めて彈出す若みどりといふ唄二上りの調子の始めなりこの後ち連川撿校一下りの調子を引出そといへり

本手組十三組端手組七組合せて二十組あり今も京大阪にて法師の習ひ傳てやんごとなきわたりの好ませ玉ふが或は神佛の法樂あらでは彈けることなし猥りになみ〳〵の人の爲に彈きて聞することを許さず強て所望すれば復すとて彈くありこの法師といふ者は四分の瞽者にて芝居狂言などの淨るり小歌とば座歌と唱へて彈くことを難く戒しむることあり

○淨るり節付の名目

淨るりの節にレイゼイまた三重などいふ名目くさ〴〵あり其そ皆な據り處あることにて三河國やはぎの長が娘淨るり姫に牛若丸の懸せしことを十二段に作りし物語に節付をして語りけるよりの物語りのしのびの段に柴のあみ戸をおしひらきといふ所のあみといふ詞のふしとアミといひ更科冷泉もろともにといへる侍女の立出づる所のれいぜいといふ文句のふしをレイゼイといふ節の名となれり又たゝきといふは昔し網笠を着て扇を持ち手を討ちたゝきて唄ふものをたゝきといふ人倫訓蒙圖彙に見えたり其節を用ゐたる所をタヽキといふ鉢扣の哥の節といへるはひがごとなり三重といふ節はふるき琵琶の手なり何某勾當の師直が前にて平家を語るに琵琶の三重を上たりといふと太平記に見えたり

○食物の調理に心得べき事

家内にて日々に食べまする食物の料理そ一切婦人の爲すべき務めなれば女たらんものはよく〳〵之に心掛けて食物の人体に効能ある理より如何なる食物が人体に宜しきかなどの譯合そ固より之を何の樣に料理したらば味が好かるらんか又は如何にしたらば身体の滋養になるべきかなどの事はよく〳〵學び置かずばなりません然ればアメリカなどにては假令ひ高官貴人の娘孃方にてよめ入りたる後ち手づから料理などなさるまじき人々ありとも女のたしなみなればとて斯る事々はくはしく學び置るゝのみならず或は特に更に教師を雇ふか又はかゝることのみを敎ふる學校へ通ひて食物調理の事を學ぶときけり況して日本の如くもとく滋養物を食べることの少き國にては料理の仕方にて太甚しき損益あることを考へ仕方の工風如何に由りては牛肉を食べるも野菜を食べるも格別の差別なき程の事ある次第をも思ひて成るべく甘くなるべく養ひになるやう料理せねばなりませぬゆゑ特更なかゝることをよく〳〵學び置かねばなりません由りて此れより食物を如何樣に料理せば宜しからんとの理合より牛肉野菜なんどと甘く且つ滋養多き樣に取扱ひまする仕方のあらましを申し上げませう

（次号へ）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●佳傳

○小野小町の傳

小町は仁明天皇の時の人にて采女などの如くいづれの國の郡司などの妹か娘かの形ちよき故に都に奉りしにてもあらん兎角に家系の知れざる人にはあれど美人のきこえ古今に高く然かも歌に堪能なりしゆゑ古今等の序にもをのゝこまちはいにしへのそとほりひめの流なりあはれなるやうにてつよからずいはゞよきをんなのなやめるところあるに似たりとて六歌仙の中にて難なきものと論せられたり同集に小町が姉の歌とて入られ又た後撰集にも同じあね又た小町がまごなどゝかきて歌を入られたるにて其名の高かりきと知らるゝなり」此の小町も昔しより余りに名高りしかば今にいたるまでさま〴〵の俗說といひ傳へて其の事虚實相ひ交はれり」かの謠曲に通ひ小町といふ名ありて深草の少將といふ人をまうけつゞりたれど然る名の人其の代にはなきとなり特に一の考あり大和物語并びに后撰集に小町と僧正遍昭と贈答の歌ありこれらに由りて作り出だせるものなるべし其の事は小町あるとしの正月に淸水にまうでられける時佛をふし拜みながら聞くにたふとき聲にて經陀羅尼よむ法師あり小町あやしみて人をやりて見せられければ蓑ひとへ着たる法師の腰に火打などゆひつけたるなりといふ猶ほその聲をきくにいよ〳〵たふとかりければたゞ人にてはよもあらじ若し少將大德にやあらんと思はれけり少將大德とは僧正遍昭のことなり遍昭俗の時は良峯少將宗貞とて仁明天皇御寵愛の藏人にて常に御側さらずめしつかはせ玉ひしかば天皇崩御ありて深草に葬り奉りし其夜より出家せられしゆゑ少將大德といふなりけり扨て小町は遍昭にやと思ひて試みに人をつかはして今夜此の寺に通夜し侍るがいたうさむきに御衣ひとつかし玉へとて

いたの上に旅ねをすればいとさびし苔の衣をわれにかさなん

といひやりたりけるかへしに

世をそむく苔の衣はたゞひとへかさねばうとしいざふたりねん

とよみておこせければ小町之れを見ていよ〳〵少將大德なりけりとおもひて日比うらなく物語りなどせし人なれば逢てものもいはんと思ひて彼の僧の聲したる所へ行かれけれどかき消すやうに失せて一寺の中をもとめさすれどいづちに逃げ去られけん其の行きがた知れざりしと云ふ事大和物語にかきたり仁明天皇を深草の帝と申しこれにつかへられたる少將ゆゑ深草の少將といふ名をもふけ作りたるなるべし」又あなめ〳〵といふ歌の事は無名抄に業平朝臣二條の后のいまだたゞ人にておはしました

る時ぬすみ出で〻行きけるを兄上たちとゞめて取りかへされたるよし伊勢物語にかけるが日本紀式といふものにあるやうハ彼の兄上たち后をとりかへし玉ふときいきどほりやすめがたくて業平のもとゞりをきりてけりされど誰が爲にも善からぬとあれバ人にも知らせず心ひとつに思ひてうかれありきけるが業平髮とはやさんとて籠り居られける間に歌枕ともみんとて東の方へ行きけり陸奥にいたりて八十島と云ふ所にやどりたる夜野中に歌の上の句を詠ずる聲ありよく〳〵きけバ

秋風のふくにつけてもあなめ〳〵

ときこゆ業平あやしみて聲する方を尋ねもとむるに人ハなくて死人のかしら一つありその髑髏の目の穴より薄一もと生ひ出たるが風になく音のかく聞えけれバあやしく覺えて此事をとふに或人の云ふ小町此國に下り此所にて命終れりかのかしらこれならんと云ふ業平あはれにかなしう覺えて下の句を附けられたり

をのとはいはじすゝき生けり

（次へ）

●叢話

○婦人慈善會

同會の第二次報告書を寄送ありましたれバ一覽の上感じたる儘を左に記錄し置く

去年第一慈善會の集金と有志共立東京病院へ寄附せられたるに同院にてハ同七月より今年の六月迄で一ヶ年間に此の寄附金を以て七百十九人の病を診察し且つ施藥ありたる由なるが其の中三百二十六人ハ全快したりとぞ然れバ此會の慈善に依り一年間に三百二十六人の命を救ひたるなり

今年は亦た收益金のうち一万千五百圓を左の四箇所へ寄附ありたりと云へバ此が爲に恩惠を受る者亦た一層多からん

●有志共立東京病院へ八千五百圓●育兒院へ千圓●養育院へ千圓●訓盲啞院へ寄宿舍一棟の建築費として千圓●合して金一万千五百圓

此會の世に施與する効德莫大なりと云ふべし官族貴夫人の尊きも既に如此し他の婦女諸君は宜しく奮起する所あるべき也

○美麗と云ふ事

如何なる人種にても大凡そ人として美麗と云へるを好まぬハあらざるべし然れバ容身形姿みにくきと色よき美人といづれか心に愛すべきやと問ハゞ如何に心なき木石の人なりとも誰れかみにくきを以て色よきに劣れりとハ云ハん是れ自然の情にして人の性なれバ固より愧づべきとにハあらずかし然れど如何なるをもて美麗と云ふやと云ハゞ是れ人により世によりて大なる相違

あり例へバ坂額の顔はみにくきとも心うつくしけれバ美麗を好む人々のうちにも之をみにくしと云ふあり亦た好しと云ふもあらん是れ一を顔にとり一を心にとる故ならん畢竟好む人の心才如何によりて已が美麗と思ふものに相違あるとなり然れバ今ま世の開けざる時及び開化せざる國民の好みめづる美麗なるものハ如何なりやと云へるとを説きて次ぎに人は成るべく高尚なる美物を愛するやうに心得たしとの譯を語りつゞけん

亞弗利加の或る方にては瞼の黒きを好とし又た或る方にてハ爪を黄ろく若くは紫にしたるを美麗とし マレー群島にてハ歯の白きハ犬の如しとて愧ぢ嫌ひ其のそめたるを美しとし荒比亞人の住める國々にてハ頬又は顳顬に傷なけれバ醜しと云ひ南亞米利加にては母たるものにして若し其子のカヽトを流行通りに形づくらせでは不慈悲なりと云ハれバ、ウン嶋にてハ髪の地に垂るゝを美人としナイル河上の邊にてハ前歯を欠きて獸に似ざるを宜しとし南米のボトクボ又はレンガスにてハ耳垂に穴あけて肉を肩の上までに垂れさせたるを格恰可なりとし南北アメリカ及アフリカにて上下の唇に穴あけたると宜しとする所多く特に中央アフリカにては婦人は大抵下唇に穴あけて何物をか挿さみ談話の際舌の工合にてみの動揺するを風流なりとせり　（未了）

○珈琲を飲む心得并に雑話

近年は外國との交通日々に開くるに從がひ西洋流の衣食什器を用ゆること漸々行なはるゝが就中珈琲などは用うる人の多き事とはなりたり西洋の茶に二種あり一は紅茶他は珈琲なり何れも珈琲茶碗に八分目に盛り砂糖又時としては牛乳をも加ふるなり茲に氣を附くべきは此茶碗の受皿の上にある匙と唯だ此砂糖と牛乳を攪和せるものにて此匙にて飲むべからず茶碗を手に持ち口を附けて飲むべし又其際必ずチウ〳〵飲音をさすべからず何國にても野蠻の民開けぬ人々ハ飲食の時音さするを嫌はず就中支那人の如きハ口を鳴らすを以て善き事の如く思ひ居るものなり先年英京倫敦にて各國公使の宴會ありし時他人ハ皆な文明開化の空氣の中に養育されたるを以て風儀万端に熟練あるに獨り支那の公使は飲食するに口を鳴らし殊に肉汁や珈琲を飲むにチウ〳〵聲を放ちて顧みる所なく反て得意らしく飲食せしと傍に居併らびし人々は大に厭がりしとぞ總て西洋の人は決して音をさするとなし實に口をクチヤ〳〵鳴らすは犬や猫の飲食するが如く見苦しき事なれば婦人などは別して愼むべし又謂ふまでもなきことながら珈琲又は紅茶が餘り熱きとて茶碗の受皿に移つし飲むべからず或時英京の或る貴族多くの人を饗應せしとき中

に一人の田舎人あり下等の家に育だち禮儀を知らざりければ食事終りて珈琲の出でし時何故か茶碗の珈琲を受皿に移して飲み初めたり坐中の人々これを見て大に賤しむ色ありける時流石に主人は貴族にて交際萬事に抜け目なき人なりし故何氣なき体にて自ら其珈琲を受皿に移し之れを飲ながら平氣にて談話し居りければ人々これを見て彼の人を蔑視する念を止めたりとぞ此貴族今客の一人が滿坐の人の賤しみを受くるを見るに忍びず斯くも見事に此人を守護りて他人の輕侮を防ぎたるは其頓智誠に賞むべし然れども禮儀は人の苟せにすまじき事にて殊に婦人には至極大切なる敎なり日本流の風俗には慣れたる御方にても文明人の眼には隨分見苦しきことども多く記者は屢々婦人に接し珈琲などを飲むに當り西洋人などが其席に居るときには思はず背に汗することまゝあるなり依て記者は茲後追々西洋文明國の風俗習慣禮儀を掲載して諸君の參考に供へんと欲するなり

○夫婦の間禮ありて官を得し事

晉の文公の時臼秀と云ふ人冀州と云ふ所へ御使にゆかれけるに冀州に郤缺と云ふ人あり賢人なれども時に遇ずして農人となり田の草を取ていけるが其妻田の畦に手づから晝飯を据へけると觀るに夫を敬ひ愼みて晴なる客に拜膳するに異ならず夫も亦聊か狎たる景色なく互に作法正しければ御使ひの臼秀つくづくと見て歸り此景狀を文公に申上ければ斯く貧しき体にても禮儀を亂さゞると成德の人なり國の輔となるべき者なりとて急ぎ郤缺を召出し下軍大夫の位に爲し給ひければ夫婦共に事へ侍りしとなん

○婚禮に白色を尊む事

婚禮に白き小袖を用うると葬禮の學び也と今世上にいふ人あり甚だあやまりなり葬禮に白色を用うるとかなしみの時なれば美麗彩色をもとめず物をかざらざると本意とする故なり婚禮に白色を用うるは婚禮は人倫の大本白色と五色の大本なり故に白色と用うるなり用うる所の白色は同じけれども本意は同じからざるなり又產のとき白色と用うる本意も婚禮に同じ

○女房と云ふこと

古へは女の事をすべて女房といふ房はねやとよむ字にて部屋と云ふに同じ部屋を持たる位の女を女房衆と云ふなり部屋と持ざる女をも女房と云ふはうやまふ心なり今は人の妻の事をのみ女房と云ふなり

●寄書

○歳暮に臨み同胞姉妹に告ぐ

越路の善庵

千代も八千代も。平らけく。安けき時を。送りつゝ。此歳もくれや。十つ二つ。末の月とは。なりにけり。さはさりながら。あきつしま。獨りはなれし。嶋の中鳥の音谷の。水の音。大和錦の　櫻花。月雪花の。樂みと。ながめなりして。くらせしは。そはそも昔し。今はまた。ゆきゝのたより。日に開らけ。海は氣船に。陸は氣車。千里隔てし。異邦と。交はり月に。幾度の。度重なれど。彼我の。事情も玆に。明らけく。利する所も。多かりき。そがなかにても。とりわけて。女子の權利の。ことがらぞ。實にも尊とき。ことぞかし我同胞の。姉妹等よ。此年は女子の權利をバ如何程伸張し給ひしや。又其必要の。基礎なる。學文技藝は。如何程に。進みたるぞや。姉妹等よ。女子も男兒と。同等な。天賦の權利。あるぞかし。さはさりながら。第一に。爲すべきことは。枝よりも。根に培ふぞ。大事なれ。權利の義務に。從がふは。世の理の常なるぞ。婦女の義務とは。何なると。問はゞ答へん。他に非ず。德を脩めよ。智を磨け。眞の神を。敬まいて。世俗の奢侈を。疎むべし。學を勉め。業を爲せ。彼の世の常の。人の如と。人情本や。しやみせんに。浮かれて長き日を。暮し。己が一つの。口すふも。己が力で。養得ず。唯だに夫に。寄すがり。權利も義務も。なふべこそ。その肉体の。樂を。滿たす一つの。器となりて。此世と終はる。徒がらは。見え麗わしく。飾るとも。これは。野蠻のものなるぞ。我同胞の。姉妹等よ。世俗に習ふ。ことなかれ。勵めや勵め。勉むべし。然らバ男女の。同權は。求めずとても。成りぬらん。此日本の。名の如く。亞細亞の上に。日輪の。光を出だす。あきつ島。いまの我等の。子孫とは。產みの母なる。姉妹等よ。月雪花に。眠りしれ。そは古へのとにして今は醒むべき。時なるぞ。年の終ると。諸共に。舊るき夢とも。終るべし。明くる明治の。十九年。歳の新さとゝ。諸共に。日々に新たに。進み行く。心の駒を。勵まして。十九の春を迎ふべし

○峯雪　　磐城　阿部直子

吹き下す夜半の嵐の音絶ゑて高峯に見ゆるゆきのしろたへ

○待郭公　　下野　齋藤ぶん

さやかなる月の光に夜もすがら閨の戸さゝで待ほとゝぎす

○かみこ　　靜岡　赤阪くに子

着敗りしのみこぞ老のしられけり

○氷　　越後　山口瑞枝

三日月とみせてながすや薄氷り

○客舍雨中　　常陸　伊藤いさ女

霏々秋雨轉寥々。孤客難眠過半宵。此際空吟牧之句。主人窓外有芭蕉。

○暑早梅有感　　麻布　稻村千□

林下早梅誰與期。花開花落幾

評　結末用古人之句。甚有姿致。

○看早梅有感　　麻布　稻村千町

林下早梅誰與期。花開花落幾多枝。氷魂雪魄黄昏月。栗在寒村亦一奇。

評　借題寓意。無限感情。

○世の中の家族内に死亡と離縁程不幸なることあされ誰れ人も知る所なるが今歐洲各國の離縁の割合を得たれバ左に掲げて看客の御一覽よ供ふ

離縁の表　第一

國名	人口千よ付比例 千八百七十年	人口千よ付比例 千八百八十年	婚縁千に付比例 千八百七十年	婚縁千に付比例 千八百八十年
英國	八、	一五、	一、	二、
蘇格蘭	八、	二二、	一、	三、
佛蘭西	三三、	七一、	四、	九、
日耳曼	、	一三〇、	、	一七、
魯西亞	一一、	一三、	一、	二、
墺地利	七〇、	九一、	八、	一〇、
伊太利	二一、	二三、	三、	三、
白耳義	二二、	五二、	三、	七、
荷蘭	四二、	五五、	五、	八、
瑞西	、	三七〇、	、	五一、
嗹馬	一七〇、	二〇二、	二五、	三〇、
瑞典	三五、	四七、	五、	七、
那威	三、	五、	、	、
ろまよや	五五、	八二、	七、	一〇、
合衆國（まさちうせつと州）	二一〇、	三六〇、	二一、	四五、

佛國よてハ離縁せし人々の三割八分ハ子供あし又五割二分ハ結婚の後十年以上を經て離縁せしなり

瑞西よてハ離縁の平均結婚一千中五十あり

英國にてハ千八百八十年中離縁せし人の中百十六人ハ再縁せり

瑞西よてハ同年中七百七十五人再縁せり

又何國よても離縁の數多きよ從て自殺の數亦多きあり

（未完）

女學雜誌花客諸君よ告ぐ

女學雜誌の前金相切れ候向ハ至急に御送金被下度候但し爲替ハ本鄕郵便局へ御取組み可被下候○郵便切手代用ハ壹錢切手よて一割增よ奉願上候以上

女學雜誌社會計部

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

○廢物利用　一冊郵税共五拾五錢　一名それ物用ひ方　既刻

廢物利用の名一度び新聞紙上に現はるゝや都鄙の別なく續々御注文を受け目下に至りて既に數白部を賣出せり其の果して廢物利用の名に背かざるを以て證すに餘りあるべし御望の諸君は至急御申込あれ

○神童詩文　第一輯既刻　正價郵税共前金六錢

我國神童の詩文を撰集し一々評語を附したる新奇の詩文集にして吟咏に志ある者の一讀すべき珍本なり

○女學雜誌合本　洋裝美本自第一号至第十号正價郵税共現金五拾錢

婦女子に關する一切の說話記事等を編集したる者なれば娘孃ある家へ歲暮年始等の進物に供するには至極く適當なる佳品と謂ふべきなり

右前金にて賣捌仕候
東京本郷弓町一丁目
女學雜誌社書籍部

○新撰繪入英語かるた　定價郵税共金十五錢

○新撰繪入羅馬字かるた　定價郵税共金二十錢

五組以上御購求の方へは割引可仕候

此カルタは遊戲の間に英語や羅馬字を覺え得らるゝ樣工夫せし者にて其有益且美麗なるとは今までありふれたるカルタの類にはあらず苟も子弟令娘等を愛せらるゝの父兄は之を其子弟令娘に授けては碑益する所少小に非るべし又歲暮年始等の御進物にはいと上も無き佳品なり請ふ陸續購求を賜へ

發兌　東京日本橋區馬喰町二丁目壹番地　興文社
賣捌　東京本郷區本郷弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

弊社女學雜誌は來る明治十八年より每月三回宛發行に相改め申候得共一月に限り五日丈休刊仕り十五日以下每五の日に發行可仕候間左樣御承知可被下候尚又た前金御廻送の名宛は自今女學雜誌社と御認め被下度此段併せて報告仕候

東京本郷壹岐殿坂上　女學雜誌發行所
女學雜誌社　發送部　會計部

社告

●本社は前金御拂込なき間は雜誌發送不仕候間御注文の節は必ず代價郵税共御送付可被下候●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵劵一割增にて御送金可被下候●爲替は東京本郷郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊社に送付可被下候●通運便を以て御送金の節は通運賃は勿論同會社より弊社への配達料(壹錢)をも御拂置き可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵税表　每月五の日發　(府內無遞送料)

	正價	郵税	合計
一冊	金四錢	一錢	現金五錢
十冊	前金卅八錢	同十錢	合計前金四十八錢
廿冊	同七十錢	同廿錢	合計前金九十錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計前金壹圓卅錢

廣告正價表　但廿八字詰

一行一回揭出	前金五錢	
同三回以上	同	一割引
同六回以上	同	二割引

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町　(大賣捌)　巖々堂

東京神田區雉子町　團々社
同日本橋區新葭町　頁明堂
同日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同京橋區本挽町壹丁目　萬字堂
同京橋區銀座二丁目　山口福松堂
同牛込區肴町　活神堂
岐阜縣美濃國笹土居町　星菱書房
越後國長岡　大橋書房
大坂備後町四丁目　岡島文店

東京芝西久保櫻川町　(支局)　萬春堂

發行所
本局　東京本郷區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社
持主兼印刷人　大庭吉三
編輯人　近藤賢宗

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY